

内村鑑三 闘いの軌跡(四)

A Critical Biography of UCHIMURA Kanzo (Part 4)

関口 安義

SEKIGUCHI Yasuyoshi

第四章 帰国と教員生活

一 北越学館事件

内村鑑三が三年半のアメリカ生活を切り上げ、帰国したのは一八八八(明治二一)年五月十六日のことであった。ニューヨークを出発してから数えると六十五日目となる。横浜港に鑑三を乗せた英国船パーシャ号が到着したのは、午後四時五十分、入国手続きなどもあり、鑑三が東京市小石川区上富坂十七番地の父母と弟妹の待つ家に着いたのは、午後九時半ごろであった。この日鑑三は、父宜之と遅くまで語り合う。

『余はいかにしてキリスト信徒となりしか わが日記より』の第十章に、鑑三は「キリスト教国の正味の印象―帰国」を置き、三年半に亘るキリスト教国での生活とその印象を、反省混じりに記している。彼は言う。「まず率直に告白させてもらいたいことは、私はキリスト教国に全く心を奪われはしなかったということだ。三年半のあいだ、そこに滞在し、この上もなく手厚いもてなしを受け、最も親しい友誼をそこに結んだにもかかわらず、わたしはキリスト教国になじみきれなかった。終始、一人の外国人としてとどまり、決してそれ以上になろうとはしなかった」(原文は英語、山本泰次郎・内村美代子訳、以下同じ)と。彼は異国において、日本という「祖国」に憧れ続けたと言う。

一方で彼は、「キリスト教国の進歩性」を高く評価する。そこには「永遠の希望」があるとも言う。それは「より崇高な人生に向かっ

て冒険を試みようとする青年の持つような希望」であるとする。彼は「多くのクリスチャンが少しも老衰を知らず」、「八十歳におよぶ老人が、まだ二十歳の若者であるかのようにして、将来の計画にふけている」のを、「奇跡にも似た驚異」と言う。彼はそれを「キリスト教の賜物」と考えている。こうしたことどもを、彼は父宜之と夜を徹して語り合う。父は年をとってはいたが、息子の語る話に熱心に耳を傾けた。

鑑三は「海陸二万マイル余をさまよった後に、ポケットに残った金はわずか七十五銭」という状況で、知的資本となりうる一枚の博士の学位証書をも持ち帰らなかった。それは見方によっては、まさに「挫折者の帰国」である。が、こうした見解は、表層的観察とも言つてよく、鑑三における帰国の意味は、決してそのようなものではなかった。三年半のアメリカ生活は、彼に多くの得難い体験と信仰上の訓練を与えた。彼は「ユダヤ人にはつまずさせるもの、異邦人には愚かなもの」を得ての帰国だと胸を張つて言う。父母はそのような息子を暖かく迎えた。

帰国翌日の五月十七日、鑑三は新潟の北越学館から教頭職での就任依頼を受ける。北越学館は、新潟県最初のキリスト教主義に立つ私立男子校で、前身は新潟英学校である。その学校の校長阿部欽次郎と、後年日本女子大学を創設する新潟第一基督教会牧師の成瀬仁蔵、それに自由民権運動家の加藤勝弥の三人によって設立され、館長には加藤が就任していた。また、新潟第一基督教会と深い関係のあったアメリカン・ボードの宣教師らが協力していた。明治二十年代初めの新潟には、まだ県立中学校もなく、北越学館は地元では評判のよい男子中学校とされた。鑑三が北越学館から招聘されたの

は、新島襄とのかかわりであつたようだ。鑑三は帰国後すぐには他に就職の話もなかった。老いた父母を置いての遠隔地への就職は、気が進まなかつたものの、経済的に苦しい家のことを思うとそうも言つてはいられなかつた。彼は新潟行きを決意する。

六月の下旬、内村鑑三は「約定書」を交わす必要もあり、新潟へ行くことになる。新幹線の通じた今日、東京から新潟までは一時間四十分ほどで行ける。が、当時は上越線も、まして清水トンネルも開通しておらず、東京から新潟までは、かなりの時間を必要とした。鑑三は東北線で郡山まで行き、郡山からは馬車で猪苗代湖へ。湖畔の宿で一泊し、次の日は湖を蒸気船で渡り、その後は人力車や乗合馬車などを乗り継いで、三日かかって新潟に到着している。困難な旅は、アメリカ時代にいくらかでも経験していたとはいえ、日本の三日がかりの旅も大変だつた。けれども、祖国のなだらかな山々や初夏の自然の美しさには心が和む。アメリカの荒々しい自然とは違つたものがそこにはあつた。

六月二十日付で、鑑三は帰国約一ヶ月のことどもを、アメリカのベル宛てに書き送る。中に次のような文面を見出すことが出来る。「友人たちは、私の精神がすこしもアメリカ化されていないことを発見して、すっかり驚いています。多年のアメリカ生活で、祖国に對する烈しい愛国心をおおたなくしてしまつただろう、と皆考えていたからです。しかし、私は、日本人として祖国を出で、日本人として祖国に帰り来たことを神に感謝します。私はいまだかつて、日本人として生れたことを悔いたことはありません」(山本泰次郎訳。以下ベル宛書簡は、すべて山本訳による)。いかにも鑑三らしいことばだ。なお、この手紙に鑑三は、秋からの北越学館教頭職が決ま

りつつあることも書き付けている。

八月下旬の新潟行きの際には、この年札幌農学校を卒業した達三郎を伴って行く。鑑三は達三郎を北越学館の教師として働かそうとの考えを持って行ったのだ。徒歩で上越国境を越える時、彼にはさまざまな希望と期待があつたはずだ。この時は、水上の湯檜會温泉で一泊している。湯檜會温泉は、水上温泉郷の一つで、谷川岳が間に迫る静かな温泉地である。湯量は豊かで。温泉はアルカリ性単純泉で、疲労回復に効能があるとされる。鑑三には印象がよかつたらしく、後年再び訪れることになる。その際「日記」に「湯檜會は明治廿一年余が新潟なる旧北越学館仮教頭として招かれて赴任する当時一泊した所である。今は昔の跡なく、只豊富なる温泉の至る所に湧出するのみである。山は深く、風は涼しく、遠路を冒して来る甲斐ある所である」と記している。

鑑三は筆まめであつた。彼は右の二十日付ベル宛ての英文書簡に、帰国後のことと、新潟行きのことなどを知らせていたが、北越学館就職のことに關しては、「今秋から始める仕事はほぼ決まりました。某中学校（専門学校と自称しています）の教頭となるのです。これは日本人だけで経営しているのですが、その大部分はクリスチャンではありません。しかも学校の管理は、あげてクリスチャンの教頭にゆだねたい、というのです。この学校は新潟市（ニイガタとよみます）にあります。人口約三万、本州の西岸なる豊沃な越後地方に位し、東京の西北約二百五十マイルにあたります。この種の学校、すなわち政府にもミッションにも頼らず、ただ日本人だけで経営される専門学校は、日本でははじめての試みです」とある。

北越学館では、アメリカ時代から顔見知りの宣教師D・スカッ

ダー (Doremus Scudder) らとも会い、旧交を暖めている。鑑三が北越学館館長加藤勝弥と教頭就任に關する「約定書」を取り交わしたのは、一八八八（明治二二）年六月六日のことであつた。「約定書」は以下のような契約条文が盛り込まれていた。^③

一 日本農学士兼米国理学士内村鑑三君を北越学館教頭として招聘し年俸六百元を給する事

一 同君の就職年間は明治廿一年七月一日より全廿二年六月三十日迄満一ケ年とす

一 同君の責任は全館教育上の事項に止て教会并に伝道上の事業には關係無之事

一 同君の信仰簡条は左の如し

い 天地と其内にある万物を造り給ひし独一無二の神の存在ましますこと且つ之に事ふるに全身全力を以てすべきこと

ろ 余の神の前に義とせらるゝは神の子人の主なる耶蘇基督に於る信仰に由るものにして之に由らずして他に靈魂の救を得るの道なきこと

は 前二項に記する信仰の簡条に触れざる以上は其余の信仰簡条並に聖典の註釈は余一己の見解に任すべき事

一 此約定は双方を満足すべき事故あるにあらざれば解約するを得ず

右約定を証する為同文同通を認め互に保存する者也

明治廿一年六月六日

北越学館々主 加藤勝弥
日本農学士兼米国理学士 内村鑑三

年俸六百円というのは、札幌農学校を卒業し、はじめて勤務した開拓使御用掛の月給三十円の倍に近い金額故、決して悪いとは言えない。もつとも四年近くもの年月をかけて、アメリカで理学士の称号を得てきたことを考えると、妥当の給与なのかも知れない。契約が一年というのは、鑑三側の要望で入ったようだ。終身雇用が一般的であった日本の社会では、期間を限つての雇用は、今ほとんどもあれ、明治日本に於ては珍しい。また、仕事内容を教育に限っているのは鈴木範久のいうように、「教育外の教会や伝道の仕事にもたずさわることになると、外国の宣教師である教師の支配下におかれたり、彼らと対立するおそれが予測されたから」なのであろう。

鑑三は「自由独立主義」に立つ野人であった。しかも何を為すにも唯我独尊である。日本人の独立を尊重し、日本人への伝道は、日本人の手で行われるべきとの確信を持つて突っ走ろうとした。一方で彼は、自己のそうした考えとやり方が、何かを引き起こさずにはいられないことを、察知していたかのようなのである。それゆえの任期一年の条項を加えたのである。

果たせるかな、彼は一年を経ずして事件を起こす。いわゆる北越学館事件と称される学校紛争の中心人物に鑑三はなってしまう。その詳細は鈴木範久の『内村鑑三日録1888~1891 高不敬事件(上)』(教文館、一九九三・一)に詳しい。事件に関する基本資料は、右に出るものはない。そこでより詳しく事件のことを知りたい方は、右の『日録』を参考にしてみらうことにして、ここでは紛争の概要を記すに留めたい。

内村鑑三を新潟の地にあるミッションスクール北越学館に招くと

いう話は、鑑三がアメリカ滞在中から、先に名を挙げた宣教師D・スカッターを通して行われていた。その際には学校の内容、特に教育方針や伝道の実際などが不明なため、鑑三は断っている。帰国後再度の北越学館からの話は、当時彼の兄事した新島襄からあった。彼はここに真剣に教師職を考へることとなる。鑑三はアメリカ時代から日本人に即したキリスト教、いわゆる日本のキリスト教をもつて、帰国したら伝道に携わろうと考えていた。それはハートフォード神学校での半年の生活を経て、決定的なものとなる。

ハートフォード神学校のカリキュラムは、アメリカで将来牧師になる人のための教師養成にあった。それはアメリカ人の牧師を目指した学生には相応しくとも、日本人へのキリストの真理を説こうとした鑑三には興味がなかった。また、牧師という職業訓練のための要素を多分に持ったハートフォード神学校は、文明開化未だ日の浅い日本人には向かない、そうしたことに時間を割くことには意味がない、単なる教育技術を説く授業、さらに言うならば、不徹底な聖書研究に立った神学校の教育は、まっぴらごめんと鑑三は考へていたのである。

鑑三が強く意識したのは、教壇の上から会衆を説き伏せるような「説教」ではなく、会衆に理解してもらおう「講義」である。彼がこうした考えを胸に弟達三郎を伴い、開館間近の新潟の北越学館に赴くのは、前述のように一八八八(明治二二)年八月の下旬、二十一日のことであった。鑑三は新しいプランを胸に、その実現を図ろうと北越学館に着任するや否や学校の改革に乗り出す。

彼は新潟までの旅の間、ずっと考へてきた館則の変更に着手する。頭の中にはすでにそれが用意されていた。その中心は、外国人

宣教師の扱いにあった。すでに札幌時代の教会建設に於て、彼は宣教師の横暴を見てきた。彼らは本国からの援助で、のうのうと暮らし、事があると口出しをする。彼らが大切にするのは、本国の意向であり、教派の指示であった。むろん鑑三には、プロテスタント教会の万人祭司説はむろんのこと、教派の意味も分かっていた。アメリカの教派からの援助も、否定するものではなかった。が、一つの教派をまとめ、維持するための憲法や規則なるものは、ままた純粋な信仰を妨げることを鑑三は早くから見抜いていた。それゆえ彼は、日本人には日本人にふさわしい伝道のやり方があるはずだとの考えが、強い信念となっていたのである。

九月十日に迫った北越学館の開館式と鑑三の教頭就任式を前に、彼は創設者の一人である牧師の成瀬仁蔵に、宣教師の無給援助による授業を辞退させるようにと言いだす。成瀬は一八五八（安政五年）八月二日の生まれで、鑑三の三歳年上に当たる。苦労人の成瀬は、アメリカをはじめとする外国の援助を今しばらく必要と考えていた。が、鑑三は当初から学校が報酬を出さない外国人に頼ることの弊害、その労働を受けるのはよくないとして、成瀬と対立する。鑑三は宣教師の無給での奉仕は、とかく日本人を低く見ることにものならず、一方で彼らが、本国からの豊かな生活資金を受けていることに、我慢がならなかったのである。それが「北越学館設立ノ主義ト目的ニ関スル意見書」（『内村鑑三全集1』）に収録に集約される。

こうした状況下、北越学館は、開館式と教頭就任式を迎える。満二十七歳の内村鑑三教頭（正式には仮教頭）の誕生であった。学校は無給の宣教師十一人、有給の日本人教師五人という陣容であった。開館式での鑑三の式辞（演説）の「要領」は、二日後の『新潟新聞』

（二八八八・九・一二）に載った。現在これは『内村鑑三全集1』に収録されているので簡単に読める。そこには、鑑三の北越学館就職の経緯と大なる抱負が語られている。就職の経緯に関しては、一年間の試験的採用で「定約」を結んだということが、これも要領よく綴られている。彼は「国民愛国の志気」の養成と経済的独立の必要を語り、次に以下のような大きな展望が示される。

若し余に拾万円の資本金を付託せられなば予は誓て諸君の前に一の立派な中学を呈出せん 若し又予に五拾万円を托せられば必らず高等中学を造出せん 若し又更に進んで一百万円の資金を予に付託せらるゝならば余は必らず東洋第一の私立大学を諸君の目前に現出せしめんことを誓ふ 知らず北越國の有志諸君は為自由、為国家に余が此の要求に應ぜらゝや否や

これを鑑三の大風呂敷とばかりには言えまい。彼は真剣に日本の教育について、伝道について考えていたのである。当時、政府は教育の必要性を、強く打ち出していた。国立の大学や専門学校ばかりか、国の後押しもあって、各地に私立の高等教育の学校も建てられるようにもなっていた。けれども、鑑三には同志社を創設した新島襄のような、人間的な包容力や事をうまく運ぶための根回しなどの世渡りの巧みさがなかった。その抱負は杜とすべきも、現実的ではなかったと言わざるを得ない。が、鑑三は猪突猛進、己の考える学校形成に立ち向かったのである。

鑑三の「北越学館設立ノ主義ト目的ニ関スル意見書」に対する、オルブレヒトラ外国人教師の意見書、それに成瀬仁蔵の情理を尽し

た「北越学館に関する意見書」なるものが残っている。それらを今読むと、鑑三の独善ぶりも伺える。新しく出発した北越学館は、百数十名の生徒が学んでいたという。鑑三は彼らに聖書ばかりか、漢学の教師による儒教の講義をさせるほか、仏教の道徳も日蓮宗の僧侶を招いて行った。鑑三自身はルターの生涯を講義した。また『旧約聖書』の「エレミヤ記」「エレミヤ書」を聖書研究として採り上げ、週一回講義をしている。彼は真剣に講義に当たった。生徒は鑑三のよく準備された内容と、巧みな弁舌に打たれる。

オルブレヒトをはじめとする外国人宣教師、それに与する成瀬仁蔵、加藤勝弥らと鑑三の対立は、鑑三を北越学館からの追放という結果を生む。十月二十四日、鑑三を支持する北越学館生徒の集会が開かれ、鑑三も出席した。集会では「誓約書」が作成され、第一条で「北越学館ノ独立ヲ計ラン為メ結合ス」と明記し、一三六人が署名した。だがこれは外国人宣教師と成瀬らには、許し難い行動であった。成瀬仁蔵は先に紹介した「北越学館に関する意見書」で、内村鑑三の非を五項目にまとめて論じ、解職を主張した。それを讀んだ鑑三は、もはや北越学館にはいられないと思う。

成瀬仁蔵は内村鑑三追放の中心におり、鑑三はこの時の成瀬の文面に激しい怒りを覚えた。それは三十年ほど後の成瀬の死に至るまで続く。成瀬は日本女子大学校（現、日本女子大学）を創設し、日本における女子高等教育の開拓者の一人となるが、後年には社会改良を目指して、婦一協会を設立、政府の教育関係委員としても活躍するが、一九一九（大正八）年三月四日、志半ばで死去する。

新聞で訃報を知った鑑三は、翌日の日記「内村鑑三全集33 日記一」収録に、「成瀬仁蔵氏昨朝死去せりとの事である、新聞紙の報する

所に依れば、氏は最初はクリスチャンであつたが今日では基仏儒神全般の宗教を超越したる宗教、即ち宇宙の靈に合致する事に努力して居られたとの事である」とし、「而して歳移り星変りて此米国宣教師の弁護者たりし成瀬君は基督教を棄て、不信異端を以て君に責められし余は福音の主唱者として今存るのである、実に不思議である」と書く。さらに後を継いで「氏は弊履の如くキリストの福音を棄てたのである、是多くの日本の紳士学者の為す所であつて惟り成瀬君のみを責むべきではないが、然し最も恥づべき賤しむべき事である」とまで言う。

鑑三にとって北越学館事件は、長く彼の心の傷となつて残つたと言ふべきか。鑑三は自身の目指す理想的学館形成のため奮闘したが、経営者・牧師・宣教師らとの対立で敗れたのである。若き内村鑑三は、大きな期待と希望を抱いて新潟の北越学館に就任した。が、彼の期待と希望は、瞬く間に潰える。鑑三の前半生は、失敗と挫折の連続であつた。最初の妻、淺田タケとの別れ、ハートフォード神学校の退学、そして帰国後はじめて勤務した北越学館では、着任早々改革に乗り出し、宣教師や日本人教師、そして経営者から反対され、挙げ句は解任されるという始末であつた。

鑑三を北越学館の教頭に推薦した新島襄は、同志社出身の横井時雄を急遽新潟に向かわせた。横井は同志社を出、愛媛県の今治で宣教し、大きな成果を挙げた人物である。横井は仲介の労にあつたものの、もはや両者の間の溝は、埋めることのできないほど深かつた。鑑三は学館の教師になつていた弟達三郎と共に新潟を去り、東京に舞い戻る。赴任後わずか四ヶ月、一八八八（明治二一）年十二月十八日のことであつた。その辞職には、事を急ぎすぎた鑑三のや

り方のまずさが確かにつきまとう。日本人の教育には日本人が当たり、外国ミッションとの縁を切るという考えはよかつた。それは札幌時代に宣教師の横暴を体験し、アメリカ留学を経ての鑑三の信念となつていたものだ。が、事を急ぎすぎたのである。

彼は日本に帰つたら「一つのJ」(JesusとJapan)に、一身を捧げようと考えていた。外国人の中には伝道の熱意に燃えた宣教師も確かにいた。しかし、彼らの多くは本国からの潤沢な生活資金に恵まれ、理想を語ることが少なく、自ら汗して働くということもなかつた。彼らは無給で日本人に聖書の真理を説くとはいうものの、それは本国からの豊かな援助あつてのことであつた。鑑三に言わせるなら、それは日本人を見下すことに繋がること以外の何ものでもないというのだ。だが、現実の北越学館は、資金繰りに困つており、館主は東京に資金集めに行くという状況であつた。宣教師に謝金を払うだけの金はない。一方、宣教師側は、北越学館で無給教師をすることが、本国からの援助を得る方途でもあつたのだ。若き内村鑑三には、そうした宣教師制度の実態、からくり、我慢がならなかつたのだ。

内村鑑三排斥の気運は、ここに頂点を極める。鑑三に「仙台東華学校外国教師総辞職ニ付余ガ感ヲ述」という文章がある。そこでは北越学館時代の鑑三が、外国伝道会社派遣の宣教師との関係を絶つ必要を説いたため、宣教師や信徒らから、いかに誹謗されていたかが、彼自身のことばで語られている。以下に引用する。

斯ノ如キノ意見ハ勿論宣教師諸氏并ニ信徒社界ヨリ激烈ノ反對ヲ被リタリ、曰ク内村ハ政事社界ニ雄飛センガ為メニ自由党

ト結合シテ其ノ厚意ヲ買ハシメメ如斯ノ意見ヲ呈出セリト、曰ク内村ハ「ユニテリアン」教ニ変信セリト、曰ク内村ハ米國在留中ハ信徒ノ仮面ヲ被リ帰国スルヤ否ヤ其ノ悪魔ノ深層ヲ現ゼリト、故新島氏ノ如キモ氏ニアルマジキ書ヲ寄セラレテ余ヲ詰ラレタリ、余ハ当時弁疏ノ無益ナルヲ知レバ余ノ心事ハ全能ノ神ニ任セ可及丈ケ默シ居レリ、心ヒソカニ思ヘラク余ヲ弁ズルモノハ時ト事実ナラント、事終ニ名状スベカラザルノ混雜トナリ余ハ五ヶ月ヲ経テ新潟を去レリ、発起人諸氏ヨリ余ノ辞職ヲ受納セラレベキノ電報達セシ時ハ余ハ実ニ苦界ヨリ救ハレシ感アリテ感謝ノ祈祷ヲ主ニ捧ゲタリキ

帰国第一の職場で、鑑三は躓いた。それは理想と現実のギャップから生じたものであつた。けれどもこの北越学館事件は、彼の生涯の歩みを象徴する。鑑三の宣教師嫌い、反宣教師感情は、彼に日本的キリスト教とは何かを真剣に考えさせることになる。より広い立場から言うならば、彼の生涯にわたる既成プロテスタント教会制度との闘いは、ここにはじまる。なお、北越学館は内村鑑三辞任後、後任に松村介石が就任したが、学校は一八九三明治二六〇年に休校、そしてまもなく閉校となる。

ほぼ二年後、アメリカのベルに当てて出した鑑三の手紙がある。そこには北越学館時代の苦闘と失業後の「悪戦苦闘」が、以下のように述べられている。左に引用する。⁶⁾

一昨年新潟でアメリカ伝道会社の宣教師諸君と接触するに至つた結果、樂しかるべかりし四カ月の間、いまだかつて味つたこ

ともないような悲痛な体験のわずかすをなめさせられました。続いて、一家を支える重い責めを負いつつも、これと戦う生計の資も得難い悪戦苦闘の一年がやって来しました。そして今年に入るや、そうそう腸チフスにおかされ、一と月というものの意識をうばわれ、骨と皮ばかりにやせ衰え、冥府よみの入口までつれ行かれ、五カ月以上も何等まとまった仕事に従事し得ず、再び建てなおすには数年を要するほどの破壊状態に追い込まれました。最近ようやく元の自分を取戻しましたが、まだ意力も体力も旧に復していません。しかしありがたいことに、私は、私を愛したもう神によって、自分が勝利者にまさる者であることを信じています。私は、財宝、知識、意力等において失ったところをば、神の永遠の善、わが救い主の癒しの力、唯一の智慧、すなわち肉のかたちをとつてあらわれ、この世の罪を除かんがために十字架にかかりたまえる神の智慧の貴さなどに対する理解の増したことをもって、つぐなわれたのです。

二 水産伝習所ほかの教師に

一八八八(明治二二)年十二月二十三日、ほろまろ這々の体で、東京小石川上富坂町の父母の家に弟達三郎と舞い戻つた内村鑑三は、以後いくつかの学校で教師を務め、糊口をしのぐこととなる。教師職は彼にふさわしい場であった。教師としての資格(理学士)はあり、また彼には、人を魅せる語り口、情熱的な風貌その他、すぐれた人間的資質が備わっていたからだ。当時、彼が勤務した学校は、水産伝習所・東洋英和学校、それに明治女学校などである。

水産伝習所は、一八八八(明治二二)年十一月二十九日に東京府が認可し、翌年一月二十日、京橋区木挽町に仮校舎を建てて開所式を行った学校である。のち、水産講習所と名を変え、第二次世界大戦後、東京水産大学を経、近年東京海洋大学となった。鑑三がこの学校の動植物学科教師となるのは、開所間もない一八八九(明治二二)年三月十六日のことである。

札幌農学校で学んだ鑑三には、動植物学科の教師は適任であった。『内村鑑三全集1』の「別篇」には、この学校で担当した「水産動物学」の講義録が収録されている。準備の行き届いた講義録である。三ヶ月ばかりの浪人生活の後の新しい仕事ゆえ、鑑三は張り切って講義に臨んだ。彼は自身が専門とする学問分野での仕事が出ることを喜ぶ。四月二十九日には大日本水産会第七回大集會に招かれ、「水産学並ニ水産学校」と題した講演を行っている。神奈川県梶橋樹農談会で、「農業と社会改良との関係」を講演したのもこの頃のことであり、それは『農業雑誌』三四三号(一八八九・七・一五)に発表された。彼は授業ばかりか、翌年八月三日から二十九日まで千葉県朝夷郡白浜村で開かれた実習まで担当した。

水産伝習所時代の教え子には、二期生に後年の評論家田岡嶺雲がいた。嶺雲は『教奇伝』の中で、「教師にも随分種々な人があつたと書き、以下のように、鑑三の白浜実習を回想している。

内村鑑三先生は、夏期の房州に於ける実習の指導教師であつた。英文の小説を読んでゐたのを目附かつて叱られた。先生は脳の補ひになるのだとかいつて何とか憐れを持葉にせられてゐた。先生がメスとピンセットを執つての魚の内蔵の解剖より

も、予が箴言しんげんとして服膺ふくようして今に忘れざるものは、「偽君子となるな」との先生の一語である。此の一語は予が水産伝習所の一年半中に於ける最大の獲物であるといつて宜い。

二十歳の時の鑑三との邂逅は、嶺雲に強い印象を与えたかのようだ。「警見の印象」〔新小説〕一九〇九・二一、「田岡嶺雲全集第四卷」収録という文章では、房州における鑑三の講義にふれた後、「予は先生の講義よりも、先生の人格から強い感化を受けた、予が服膺して今も猶忘れないのは、偽善者たるなどの其折の先生の一語である」と同じようなことを書いている。鑑三には早くから預言者の風貌に加えて、含蓄に富んだ弁舌が備わっていたのである。

同時期に鑑三は、東洋英和学校の講師も兼ねた。ここでは万国史を教えた。東洋英和学校はメソジスト系の学校で、現在の麻布中学校・高等学校の前身である。学生に後年の評論家山路愛山がいた。在学期間は一八八八（明治二一）年からの二年間であった。愛山は佐幕派の出で、一八六五（元治元）年一月二十三日江戸浅草の生まれ。鑑三の四つほど下にあたる。徳富蘇峰の知遇を得、民友社に入り、『國民之友』『國民新聞』の記者として、政治および史論に筆をとった。また、キリスト教メソジスト派の雑誌『護教』の主筆でもあった。愛山は鑑三の講演を聴いて心を動かされたことを、後年『基督教評論』（警醒社書店、一九〇六・七）中の「保守的反動（二）」の章に回想することになる。さわりの部分を引用しよう。

余は猶ほ記す。明治廿二年の天長節において、余は麻布の東洋英和学校に於て内村氏の講演を聞きたり。当時彼は、其の演壇

を飾れる菊花を指して曰ひき、此菊花は自然が特に日本を恵みたるもの、一なり。菊は実に日本に特有する名花なりと。彼は更に声を揚げて曰く、諸生よ、窓を排して西天に聳ゆる富嶽を見よ。是れ亦天の特に我国に与へたる絶佳の風景なり。されど諸生よ記せよ、日本に於て世界に卓絶したる最も大なる不可思議は実に我皇室なり。天壤と共に窮きはまりなき我皇室は実に日本人民が唯一の誇とすべきものなりと。其肅々たる態度と、其誠実を表はして余ある容貌とは深く聴者の心を動かしたりき。彼れは科学者なり。彼れは泰西の文学に就て多くの興味を有するものなり。されど彼れは愛国者なり。当時の彼れは聖書とシエーキスピニアと太平記とを愛読せり。彼は太平記を愛し勤王の情に焚もゆることに於て酔乎として酔なる日本人なり、保守党なり。されど彼れは不思議にも保守的反動の犠牲となれり。彼れは第一高等学校の教師として翌年の天長節に於て賢オムレンツきあたりの御尊像を宗教的の意義に於て拜オムレンツむすることに躊躇したるが為に世間より不敬なる漢子オムレンツなりとせられ、教育界に対しては全く流輩者に均しき悲境に投げられたり。

東洋英和学校時代の鑑三の姿を的確に捉え、その後の「悲境」にもふれた文章である。いかにも右派の論客山路愛山らしい鑑三評と言えよう。また、鑑三の教育者としての姿を、「其肅々たる態度と、其誠実を表はして余ある容貌とは深く聴者の心を動かしたりき」の一文に集約するところなど、鑑三の特色をとらえて余ますところがない。

内村鑑三は万丈の背丈、若くして長者の風貌を漂わせ、語ること

ばには力があつた。それは教育者としての恵まれた資質の持ち主であることを証す。愛山はそれ以前に「英雄論」(『女学雑誌』一八九一・二)を発表、そこで「信仰あり、平和あり、独自ある所の男子漢を要す、女丈夫を要す」と述べていたが、内村鑑三はその願いになつた人物(英雄)として映っていたかのようだ。

当時女子の高等教育機関として知られた明治女学校にも、鑑三は出講していた。が、どの学校も、今言うところの非常勤講師である。専任ならば給与もそれなりに貰えた時代ではあつたが、非常勤ではそうはいかない。そこで掛け持ちで、いくつかの学校の授業を担当することになる。非常勤講師には授業以外の業務はないものの、給与の低さには参つたことだろう。老いた父母、それに弟妹の経済的面倒も見ねばならぬ。鑑三は休む暇もなく働いた。

明治女学校は一八八五(明治一八)年、木村熊二を校長に、巖本善治・植村正久・島田三郎・田口卯吉らが発起人となり、出発した。外国ミツシヨンの援助を受けずに日本人女子の高等教育を目指した学校であつた。鑑三はここで、高等科の「生物学」を担当した。明治女学校には、巖本善治の主筆した『女学雑誌』に寄稿していた星野天知・北村透谷・島崎藤村ら、のちの『文学界』のメンバー、それに巖本の妻、若松賤子らも教鞭を執つたことでも知られるが、外国ミツシヨンの経済的援助を受けなかつたので、経営は常に苦しかった。鑑三がこの学校の講師に名を連ねた頃は、草創期の熱気がまだ残っていた時代である。

彼が明治女学校で「文学に於ける聖書の価値」を講演するのは、一八八九(明治三二)年六月二十二日であり、高等科の開業式で女子教育について講演するのは、九月十一日のことであつた。佐波亘

編『植村正久と其の時代』第三卷(教文館、一九三八・四)に、その記録が見出せる。鑑三は、その後もしばしば明治女学校では講演をしている。熱心に聴いてくれる女子学生に語るのは、鑑三の好みのようであつた。当時この学校に在学し、鑑三の講演を聴いた野上弥生子は、後年、次のように回想している。これは鈴木範久の『内村鑑三』(岩波新書、一九八四・一二)が、すでに文献として紹介していることでもあるが、以下に引用する。

いつかは突然、諸君は一度、太平洋の日の出を見なければいけないとおっしゃつた。犬吠埼あたりに立つて、朝、太平洋から昇るこんな大きな、真つ赤な太陽を見ることが非常に必要である。形はこんなに壮大で美しく、創造の神の力を生き生きと認識する。そういう言葉ではなかつたかと思ひますけれども、今の言葉でいうと、そういう意味のことだつたんですね。ただそれだけのことなんだけれども、打たれました。

いかにも鑑三の語りそうなことだ。一般には気障に思われてしまうことでも、巨漢の彫の深い顔の鑑三が歯切れのよい江戸弁で語ると、何か深い意味があるかのように思われてくるのである。

前後するが、一八八九(明治三二)年二月十一日、大日本帝国憲法が發布された。プロイセン憲法を参照し、伊藤博文・井上毅らが起草し、枢密院で可決したものである。全文は七章七十六条から成り、三権分立、臣民の権利・自由の保障が取り入れられてはいたが、天皇を万世一系・神聖不可欠とし、統治権を掌握するという条項は、肝心の議会の地位を制限するものに繋がつた。鑑三の生きた時

代を縛ったのは、この天皇を神聖不可欠とした大日本帝国憲法でもあった。

その日、憲法発布式典の出席準備をしていた文部大臣森有礼ありのりが、右翼の青年西野文太郎に出刃包丁で腹部を刺され、出血多量で翌日死亡するという事件が起こる。鑑三は三十年後の一九一九（大正八）年二月十一日の日記に、この事件を回想した後、「憲法が発布されて黄金時代が日本に臨んだやうに感じたる人が多くあつた、然し其れは夢であつた、其時以来日本は道德的には段々と悪くなつた、殊に政治家の墮落、愛国心の減退は最も著るしくある」と書き付けている。

このような時期に東京に舞戻つた内村鑑三は、生活の爲もあつて、いくつもの学校に出講し、講義に向かつた。これまでに引用した若干の例でもわかるように、鑑三の講義は青年をひきつけてやまないものがあつた。彼は単に知識を伝授するに止まらない。自身の信念を込めて事の信疑を語るのも、どの講義も魅力と迫力に溢れるものとなる。彼は何よりも教師としての資質に恵まれた研究者であつた。けれども型にはまるのを嫌つたので、学校教育法で縛られる公立の学校には向かなかつた。この時期、鑑三はいくつもの学校で授業を担当するばかりか、教会からの依頼の講演にも、積極的に関わることになる。

鑑三はここに教育者、そして伝道者の道をも歩みはじめた。アメリカ留学以前から面識のあつた、植村正久が牧師をしていた一番町教会（富士見町教会の前身）の夕礼拝で説教をするのは、一八八九（明治二二）年十月六日のことである。また、同年十一月二十四日の日曜日には、同じ一番町教会で「人生の目的」と題した講演を行つて

いる。この教会の長老に、後年三六式無線電信機の発明者の一人となる、クリスチャンの木村駿吉がいた。彼は当時第一高等中学校に勤務していて、鑑三の説教や講演を聴き、その教育者としてのすぐれた資質を見抜いていた。鑑三が第一高等中学校の専任の教師になるのは、この木村駿吉の斡旋による。このことは本章の第四節で詳しく述べることにする。

三 横浜かずとの結婚

一八八九（明治二二）年七月三十一日、内村鑑三は幼なじみの横浜かず（加寿子）と結婚する。かずは旧高崎藩士横浜恕よしのぶの娘である。鑑三には前妻タケとの間には一女ノブがいて、タケの実家淺田家で大事に育てられていた。タケはノブを盾に離婚を承知せず、鑑三のアメリカ滞在中も復縁を迫るということがあつた。鑑三はそれに対し、きつぱりと否定する態度をとつていた。新島襄が二人の間を何とか取り持っていたが、前年（一八八八）には、すでに匙を投げていた。タケはその後、松岡信吉という人物の子どもを宿す。タケは鑑三との復縁を夢見ながら、一方で他の男子と通じていたことになつた。タケは自身の妊娠を知つて、復縁を断念せざるを得なかつたのである。なお、タケはこの後、松岡と正式に結婚した。

この年五月十一日に、タケが松岡信吉の子を出産したとの報を受け、鑑三は直ちに離婚手続きを取り、三日後の五月十四日付で、タケと正式に離縁した。鑑三はこれまでしばしばタケをはじめ周辺の人々の復縁工作に対して、不快感を示していた。その在米中の書簡に見られる「彼婦ハ全ク姦淫ヲ犯セシ者ナレバ我等再ビ入レ度思フ

トモ入ルベカラザル人物ナリ」(内村宜之宛、一八八六・四・二五、『内村鑑三全集36』に収録) という鑑三の考えは変わらず、復縁などもつての外であった。

二人の間に出来た女兒ノブは、タケの母浅田ヨネが大事に育てていた。鑑三はヨネへの感謝は強く、ヨネがノブの写真を同封した便りを寄こした時には、丁寧な書状を出している。一八九〇(明治三三年)二月五日付でヨネ宛てに出した便り(『内村鑑三全集36』に収録)には、「拝啓、先日ハ御書面ヲ被下又其節ハ小兒写真御送り被下有難奉存候、永々ノ御養育サゾ御面倒ト御推察申上候」とある。続けて鑑三は「御都合ノ節ハ何時ナリトモ御通知次第方ヨリ引取りノ為参上可仕候間左様御承知被下度願上候」とまで書く。これは外交辞令的言辞とは言えまい。鑑三はノブを引き取り、育てることも覚悟していたのである。が、ノブは、タケの兄浅田信芳夫婦に子が恵まれなかったため、やがて浅田家の養女となり、幼い頃は、主として祖母の浅田ヨネによって育てられた。鑑三のノブに寄せる愛は、後に生まれるルツ子や祐之に比べると、ずっと淡い。それもこうした経過ゆえ、致し方ないものであったとしてよい。

鑑三がタケとの離婚の届けを出すのは、右に記したように、一八八九(明治三二年)五月十四日、横浜かず(加寿子)との結婚は、その二ヶ月半ほど後の七月三十一日である。かづは一八六九(明治二年)三月四日の生まれで、鑑三より八歳年下の十九歳であった。旧高崎藩士の娘で、家も近かった。二人は幼なじみであった。高崎の武家屋敷の一角にあった鑑三の家は、現地調査をすると、烏川と碓氷川うすいの合流するところに近く、少年鑑三は川で魚取りに興じることが多かった。その際に、近くに住んでいた幼いかづを伴って行ったこ

ともあったのではないかと、現地調査の折りに、頭をよぎった考えである。わたしは内村家の旧居跡を訪ね、烏川まで歩きながらそうした想いにしきりにとらわれた。鑑三はこのような幼なじみの女性を、再婚相手に選んだのである。

どのようないわれで二人が結婚に至ったのかの詳細は、分かっていない。しかし、内村家ではタケのケースで苦勞しており、学歴はなくとも性格円満で苦勞を厭わない女性を欲していた。両家とも旧高崎藩士の士族であったという族籍も、この場合役立ったようだ。横浜家では、高崎藩士内村宜之の長男で、秀才として知られた鑑三は、たとえ今のことばで言うバツイチであろうと、婿候補として申し分なかったはずである。鑑三も好感を持っていた幼なじみで、その上家事にも慣れた家庭婦人向きの女性は、それなりに再婚相手として申し分なかったに違いない。

いままじしことはを費やすなら、没落士族出のかずは、高等女学校を出ているわけでもなかった。学歴的には、鑑三と釣り合いはとれないものの、嘘をつくことのない素直な女性で、実家では継母に仕え、家事には長じていたという。鑑三には幼なじみのあどけないかづの面影が、ここに来ても残っていたらしい。それゆえ喜んで話に応じたようである。かずは結婚後、夫鑑三ばかりか、一緒に住んだ内村一家にもよく尽くした。今度は父母も鑑三の再婚に反対もせず、むしろ喜んでいたようだ。鑑三はいまだ童顔を宿したかずを心から愛した。

結婚後しばらくは、二人は父母の家に同居した。しかし、父の家は狭いので、鑑三がこの後、第一高等中学校の専任教師の職に就き、生活上の目鼻が付くと、二人は家を借りて転居している。前妻タケ

は、教育は受けていたものの、見栄っ張りで嘘をつくこともしばしばで、鑑三は無論のこと、同居していた家族をも悩ました。が、かすはそうしたことの無い、素直で家庭的な女性であった。幼なじみであったことや、八歳の年齢差もこの場合有効だった。北越学館事件で傷ついた鑑三を、慰めるものをかすは多分持っていたのである。結婚し、精神的に安定した鑑三は、明治女学校や東洋英和学校で講演をしたり、先に記したように、植村正久が牧師をしていた一番町教会の夕礼拝で、説教や講演を受け持ったりしている。

翌一八九〇（明治三三）年一月二十三日、アメリカ留学中からいたく世話になった新島襄が死去した。アマースト大学への進学を勧め、シーリー学長に紹介したのは、他ならぬ新島襄であり、帰国最初の就職先となった北越学館も、また、彼の斡旋によるものだった。そうした意味では、鑑三にとつての新島襄は恩人だった。新島はとにかく世話好きであった。彼が鑑三に示した厚意は、尋常ではない。けれども鑑三は、その交流の当初はともかく、帰国後には、新島と一歩距離を置く態度を崩していない。鑑三に「新島先生の性格」という文章がある。新島が没して、十七年近くを経たの回想である。四百字詰め原稿用紙にして五枚ほどの短いものながら、自分と新島襄とのかわりを客観化しながら、綴っている。

鑑三はここで、新島を「事業に忠実であつたこと、愛国心が強くして日本を思はれたこと、それから基督教に深く帰依して居られたこと等は、何人も異議のないところである」と書くが、「唯一つ私の疑ふ点は、先生を宗教家と見る事が出来やう乎、其一点である」とし、次のような辛辣な批判に及ぶ。

先づその事実を見るに、同志社が出す人物には宗教家は少ない、満更無いとは言へないが、割合に少い、それは宗教を説くもの凡てが宗教家であるとする、左様な標準によるならば談は又違つて来ようが、世には名は政治家でもその実宗教家なるものがあると同じく、名は宗教家でもその実又政治家なるものもある、同志社で出した宗教家には真の宗教家なるものは甚だ少いと思ふ。重ねて約言するならば、新島先生は誠実の士である、愛国者であつた、自己の爲したる事業には熱心なる人であつたとは言ひ得るが、宗教家には言ひ兼ねるといふ事に帰着する、
(傍線筆者)

鑑三の鑑三たるところが、よく現れた人物評である。前にも記したが、新島襄は鑑三の十八歳もの年上で、師弟関係でいえば理想的年齢差である。それ故、若き日のアメリカ留学中は、新島を「先生」と呼び、自らを「弟」と称し、新島の配慮ある行動に敬服することが多かった。けれども、帰国後は妻タケとの離婚問題や北越学館事件に際して新島の取つた態度に、鑑三は疑いの目を向け始めることになる。鑑三に言わせるなら、新島はタケの懇願で、鑑三との関係を元に戻させようと図つたり、北越学館事件で闘っている最中に、弟子の伊勢（横井）時雄を派遣して調停に乗り出したりした、その政治性が鼻についたのである。

そうしたこともだが、右の「新島先生の性格」の一文を生んだのである。それにしても厳しい評言だ。神はそれぞれの人間に適つた才を与えると考えると、新島の政治性もまた、それなりの意味を持つとも言えそうだが、一本気の鑑三には、通じないものであった。

それゆえに右に引用した文章の傍線を引いた箇所など、鑑三の新島裏に抱いた率直な疑問の現れであったのかも知れない。なお、『内村鑑三全集15』の「解題」(渋谷造)には、右の文章を「談話筆記であるような印象がなくもない」との解説が見られることも、念のため記しておこう。それだけに、遠慮会釈もない語り口が目立つのか。

さて、横浜かづと再婚後一年にも満たない一八九〇(明治三三)年の春三月、鑑三は伝染病の腸チフスに犯され、急遽避病院に入院する。腸チフスは、現在はその恐るべきものではないが、その頃は下手をすると死に至った。病は発症者の大便や尿に汚染された食物、井戸水などを通して感染する。全身倦怠、そして高熱が持続するのが特徴で、回復には普通一ヶ月半から二ヶ月を要したとされる。明治から第二次世界大戦後しばらくの間、腸チフスは伝染病として恐れられた。法定伝染病ゆえに、病人は避病院に隔離される。新婚のかずは、入院して危篤状態に陥った鑑三をよく支え、自身の生活を犠牲にしてまで誠心誠意介護に当たったという。

鑑三の入院は、通常の患者より長く、二ヶ月半に至った。その間には、留学時代世話になった実業家のモリス夫妻が、内国勸業博覧会見学に来日し、鑑三を入院中の東京第一病院に見舞うということもあった。義に厚い鑑三は、「ウイスター、モリス氏に関する余の回顧」に、「余は不幸にして時に第一病院に入院なりけるがモリス氏夫婦は直に余を見舞ひ其暖かき握手は一生活忘却する能ざるなり」と記すことになる。

ところで、この年七月五日から十二日まで、キリスト教青年会主催の第二回夏期学校が東京芝白金の明治学院を会場に開かれた。病の癒えた鑑三は、最終日の十二日に品川の観桜館で開かれた懇親会

に出席している。島崎藤村の自伝的小説『桜の実の熟する時』(春陽堂、一九一九・二)に、この夏期学校が美しく回想されている。そこには「日本にある基督教会の最高の知識を殆んど網羅した夏期学校」として出てくる。明治学院に在学中の若き島崎藤村の書き残した、この夏期学校印象記は、なかなか興味深いものがある。そこには鑑三よりやや年上の植村正久や押川方義や徳富蘇峰らが、イニシアルで記され、彼らを羨望の眼で眺める藤村とその仲間の姿がとらえられている。当時の鑑三は、いまだ無名の一キリスト者に過ぎなかった。その上、腸チフスという重い病からの回復中の身であった。彼は招待状に応じて、病後の身をいたわるかのようにして、知り合いが多くいる懇親会に出席したのであろう。

四 第一高等中学校に就任

一九九〇(明治三三)年夏、内村鑑三は八月三日から二十九日まで、水産伝習所の房総白浜海岸実習に生徒を連れて参加した。このことは、先にもふれた。そこで彼は神田吉右衛門という人物に遭遇するのである。わたしはこのことを、鈴木範久の『内村鑑三日録1888-1901 一高不敬事件(上)』(教文館一九九三・二)ではじめて知った。房総白浜海岸というのは、南房総の太平洋に面した海岸で、当時は千葉県匝瑳郡白浜村に属し、マグロ漁とアワビの収穫、そして海水浴場でも知られた。南房総の海岸は、今も漁業と夏は海水浴で賑わう。当時、富崎村(現在、館山市布良)という、これもまた漁業で栄えた村があり、その漁師に神田吉右衛門という人物がいた。一八三四(天保五)年十二月の生まれなので、鑑三より二十七歳ほど年上

である。

鑑三が後年神田吉右衛門を「老人」と言っているのは、吉右衛門が実際年齢より老けて見えたことによるのであろう。漁師は激しい労働と紫外線ふのせい、総じて外見が実年齢より上に見えるものがある。この人に会い、鑑三はその進路をも変える大きな影響を受けることとなる。まずは鑑三の回想に聞こう。最初に『内村先生講演集』（東北帝国大学農科大学基督教青年会編、一九三・一〇・一、『内村鑑三全集20』収録）から、以下を引用する。

私は此の際丁度よい機会でありますから私が何故に水産を廃めたかを告白して見度い。其の最初の理由は、私が学校を卒業し、東京へ参る時、小樽から田村丸と云ふ船にのりました、鯨にしんの粕しめずと同居して三等船室に陣取りましたがこの室には沢山の漁夫の出稼でかせ人が乗り込んで居ました、彼等は漁期が去つた為めに帰国する所でしたが、未だ船の出航に間があると云ふので博奕ばいを始めました、この光景たるや非常に盛大なものでありました、見兼ねたものかこの席に警官が踏み込んで来ました、其の時の人々の狼狽ろうばいは激しいもので私の前にも五円札が飛んで参りました。私はこの有様を見てつくづく感じたのは斯る漁師に金を与ふるは博奕の材料を与へる様なものであると云ふ事です、しかし私は未だ水産は廃めませんでした。其後私は水産講習所に教鞭を取つて居ました時に生徒を率いて房州に参りました。房州の布良村ぬら（筆者注、布良村は前年に相浜村と合併し、富崎村となつていた）に神田吉右衛門と云ふ実地じつちに關しては日本に有名なる漁夫ぎよふがありました、一夜私は彼と共に炬火くわくわを囲むで話

をしましたが、談興に入つた時彼の申しますには、内村さん改良もよいけれど何よりも先きに漁師りしを改良しなければ駄目ですよと道破みちやぶしました、之れを聞きれた私は成程左様だと思ひました、これが私が水産科をお暇いとま乞こした理由であります、法律や改良法は具はつても農民の心を動かさなければ駄目であります

今ひとつの回想は、より具体的に神田吉右衛門の漁民観と、それに影響された鑑三自身の考えを語る。その文献「予が聖書研究に従事するに至りし由来」(講演、『聖書之研究』13号、一九〇一・九・二〇、『内村鑑三全集9』収録)を以下に掲げる。

第一に予を聖書の研究に引き入れたるは矢張り自分が専門として居た実業問題であつた、予は常々感じて居つた、それは他でもない日本実業の不振は資本の欠乏や実業教育の不完全にあらずして一に人心道義の頹廢たいはいに在るとの意見であつた、結局て云はゞ実業問題は即宗教道德の問題であるとの考であつた、忘れもせぬ予が本職として従事せし実業を抛擲なげつたのは明治二十三年の夏、——恰度今頃で会々漁業調査の為房州に出張した時のことであつた。当所に神田吉右衛門と呼ぶ老人があつて毎夕二人で種々の雑談を試みた。然るに或夜の事神田老人切に歎息して幾許鮑魚あわびの繁殖ふせいを凶つても、幾許漁船を改良し新奇の網道具を工夫しても彼等漁夫共を救助きうすてやることは出来ぬと熱心に話し出した、予は甚く為之このために脳漿のうじやうを刺激された、この事について深く考込んで居た最中に如上な談話をきかされては堪らぬ、予は忽ち或決心を強固きやうこめたのである、夫と同時に今迄の職

業に何だか張合がなくなつてきて空気を打つ様な気持が仕た、如何にも漁夫の生涯程不憫極まるものはない、今年は大漁猶だから定めし有福にならうと思つて居ると鮭魚が網に入れば直ぐ其儘料理屋へ駆込んで一夜に百も二百も費やすといふ始末、儲けた金銭で借金を払はうといふ心懸もなければ貯蓄しやうと云ふ考もない、名案、新法、大骨折、大利益、是等は凡て皆彼等の放蕩を増長せしむる許り、東西到る処の海辺、鱈捕り、鮑捕り孰れも絶望の状態であつた、於是予は斯る者共に金銭を与ふるのは却て国家を貧弱に陥るゝ源ではないかとの疑問を起した、

ここには内村鑑三が、なぜ水産学という学問を止めて教育者(宗道家)として立とうとしたかが、率直に語られている。神田吉右衛門という一漁師のことはから、鑑三は教育の大切さを改めて知らされたのである。

内村鑑三が第一高等中学校の教員(囑託)となるのは、この年(一八九〇)九月のことであつた。九月二日付の辞令を彼は受け取る。第一高等中学校就職の話は、一年ほど前から出ていた。鑑三は北越学館事件で学校経営の難しさを知っていた。けれども、管理職などではなく、一人の教師として人を教えることには、相変わらず希望と喜びを抱いていた。彼には人を魅せる天賦の才があつた。彼には教育という営みには、優れた専門家としての研究が伴つてはじめて成り立つという事情もよく分かっていた。それゆえ第一高等中学校からの招きには、自己に適した仕事であると鑑三は確信し、受諾したのである。

具体的な就任事情は先にちよつと記したが、植村正久の牧会する一番町教会の長老木村俊吉から来た。木村は当時第一高等中学校の物理学の教授であつた。彼は鑑三の説教や講演を一番町教会で聴いており、人として接するに及び、その識見・風貌・举措・動作にまで惚れ込み、こういう人物が自分の勤める第一高等中学校にいたならば、どんなによいかと思うようになる。そこで木村は校長の木下廣次に推薦し、実現に至つたものであつた。その事情は、木村の「懐旧談」によれば、以下のようである。

帰朝してから僕は偶然交際を始めたが、熱烈至純な愛国者で偏狭ではあつたが、君の一生の事業が愛国の精神で一貫してゐたことは、誰れでも皆知る処である。僕は内村君の純なる愛国心と学問を实地に応用する多能には感服したのさ。第一高等学校の校長は木下廣次先生で、司法省法律学校の出身で明治時代の志士の面影を多分に持つ熊本県人であつた。僕は此の学校の教諭(今の教授で二十五歳と云ふ世間知らずのぼつちやんであつた)であつた関係から、木下校長に説いて内村君を講師に採用して貰つた。

第一高等中学校とは、一八八六(明治一九)年四月に東京大学予備門の名称を変えて成つた学校である。さらに遡れば、鑑三の学んだ東京英語学校は、一八七七(明治一〇)年に東京大学予備門と校名を変更した学校であり、その意味では彼は母校の教師となつたことになる。後の第一高等学校は、この第一高等中学校を改称して成り立つたもので、ここには全国から中学校を卒業した、優秀な生徒が

集まることになる。

鑑三の担当科目は、留学体験もあることが評価され、英語と地文学であつた。地文学とは現在あまり用いられない、耳馴れないことばだが、「地球と地表近くの自然現象を研究する学問」と辞書にはある。現在の地理と地学を合体した地球科学とでも言つてよい学問である。もともと鑑三は札幌農学校時代、それに留学中はアマースト大学で、こうした学問に関心を示していたから、英語の他に地文学を担当するにふさわしく、その学力があると認められたことになる。

後年彼は『地理学考』（のち、『地人論』と改題¹³）という全編書き下ろしの著作を発表する。現在は『内村鑑三全集2』に収録されているので容易に読める。全集「改題」で鈴木俊郎は、「著者が本書の構想を早くからいだいていた」とし、「本書の構成は、地理学研究の目的、地理学と歴史、地理学と摂理、アジアと西方アジア、ヨーロッパ論、アメリカ論、東洋論、日本の地理とその天職、南三大陸より成る」とまとめる。わたしはこの書物は、鑑三が第一高等中学校で講義した地文学のノートに基づいたものと推定する。

こうした折に、わたしは大岡 信の「地理の書 思想の書―『地理学考』の内村鑑三¹⁴」という文章に出会つた。この文章で大岡は言う。「これは何という雄大な構想をもつた若々しい書物だつたことだろう。『地理学考』あるいは『地人論』という題名だけからはとても想像しえない情熱の書がこの本だつた」と。鑑三は優秀な生徒に負けまいと、多少背伸びをしながらも、この書に書いたようなことを授業で語つたのではないか。それにしても鑑三は真剣であつた。

鑑三の身分は、正確には嘱託教員（講師）で月給は六十五円であ

る。この金額は、鑑三が札幌農学校卒業後、開拓使御用掛となり、月俸が三十円（年俸三六〇円）であつたことからすると、かなりよい（ちなみに北越学館のばあいは、年俸六〇〇円での契約であつた）。新帰朝者ということも考慮されたようだが、倍以上の給与である。政府の高等教育重視策も反映していたと見てもよいだろう。国は中学校令で北海道、沖縄を除く全国を五区に分け、一高から五校までの高等学校を設けた。第一高等中学校（のち第一高等学校と改称）は、首都東京の本郷に設けられた。

内村鑑三の第一高等中学校就職時の校長は、先の木村駿吉の回想にも出て来る法学の木下廣次である。彼は帝国大学法科大学教授でもあり、第一高等中学校の校長職は、兼務であつた。なお、木下廣次は、のち京都帝国大学総長となる。鑑三は授業の他に、六百人収容の寮の生徒相談役も受け持つた。彼は嬉々として新しい仕事に当たつた。定職を得た鑑三は、妻と共に父母や弟妹と同居していた小石川上富坂十七番地の狭い家を出、学校に近い本郷駒込東片町一五二番地の借家に移る。

この頃の鑑三の張り切つた様子は、アメリカカのベル宛書簡（二八九〇・九・二六付）に見ることができ、引用しよう¹⁵。

この秋から東京高等中学校に関係し始めました。アメリカのカレッジより、ごく僅か低い程度の学校で、一千二百名以上の学生と、六十人に余る教授、教師団とを擁する、官立の一大学園です。私は主に寄宿舎の監督に当たつていますが、ここは日本の青年中でも一番賢い、鋭い、慧い青年六百人を収容しています。私の他にも一人、特に学生の健康方面の指導に当たる

者がおり、従って精神方面の監督ともいふべきものは、私にゆだねられています。これ位の寄宿生を収容しながら、これ位秩序立った寄宿舎は、キリスト教国アメリカでもまずご期待にならないでしょう。学生の態度はおおむね立派です。彼らの理想は高く、その道徳観念は私がアメリカで知り得た最も立派な青年のそれにも劣りません。

鑑三はよき職場を得たのである。当時の第一高等中学校は、生徒数一二〇〇人、その大半が寮生活を送っていた。そうした中で寮生の生活相談を受け持ち、授業にはアメリカ方式とも言える討論を採り入れたやり方で臨んだ。彼は多くの生徒から憧れの目をもって眺められた新帰朝の青年教師であった。鑑三は、新しい気分のもと、新たな職場での仕事に取り組む。ようやく巡ってきたかの感のある仕事である。木村駿吉の先の「懐旧談」には、全国から集まった優秀な学生を前にした青年教師内村鑑三の張り切りようと独断性が、率直に描かれている。就任当初の鑑三の姿は、木村によつて次のように回想されるのである。

内村君は教員の中で全く毛色の異なつた者であつた。経歴も役人とはそりが合はない。それに其の頃はヤソ教信者を非国民の様に見る時代であつた。そこへ内村君は学校の為め学生の為め、良かれと思ふことは無遠慮無頓着に実行した。英語の科目を受持つたが、その頃一般に用いられてゐた、外人の書いた難解の哲学的論説的の教科書には一顧を与へずに、また英語科の主任教授や先輩教員には相談もせず、学生が法科生であると云

ふ理由で、出版された計りの伊藤公の英文日本憲法義解を教科書にして、学生と議論を闘はせながら講義を進めて行つた。その外課外の時間を設けて、学生に弁論をさせ、之れを批評し指導してゐた。学生は勿論喜んだ、それと共に学生間に評判がよい。僕も推薦の甲斐ありとして大に満足し安心してゐたが、それはほんの束の間であつて、教員室には白眼で睨まへてゐたものがあつた。

鑑三は右の木村駿吉の回想に見られるような新しい教授法をもつて授業に臨んだ。討論式授業は当時からアメリカでは存在した。それをしないと学生は満足しない。今でもそうだが。アメリカの大学では、教師の話を唯聴くだけでなく、授業中に積極的に意見を言い、質問をする。わたしは一九八〇年代後半のアメリカでの日本語教育でこうした授業を体験し、また任された授業で実施したことがある。鑑三はこの授業方法を明治二十年代の日本の後期高等教育に採り入れたのである。彼はそうした授業のいくつかを、アマースト大学でも経験していたのである。現代の日本の高等教育では、ディベートと称した討論による授業も決して珍しいものではないが、当時は日本の学校ではなじみが薄かつた。教壇からの教師による一方的「講義」が一般的であつたのだ。

鑑三は新帰朝の颯爽とした青年教師である。一八〇センチに近い背丈は、当時としては珍しく、眉は太く、鼻下に口ひげを蓄えた風貌は、当時の日本人離れをしており、人を魅せるものが多分にあつた。しかも、その仕草は役者のようで、無駄がなかつた。彼には、人を捉えて離さない教師としての、さらに言うならば、預言者とし

ての恵まれた容姿と演技力とが備わっていた。それは終生変わらなかった。後年こそ、そうした所作に反旗を翻す者も出たが、青年教師として教壇に立った内村鑑三は、魅力に溢れていた。多くの生徒は、彼の授業内容もさることながら、その役者めいた仕草の虜ともなっていく。

政池仁の『内村鑑三伝』¹⁶には、後年の鑑三から直接取材したこととして、以下のように記す。

腸チフスのため二月に前記三つの学校を辞めた内村は、その九月には第一高等中学校（後の第一高等学校、今日は学制が変って東京大学教養学部となっている）の嘱託教員となつて英語、地理、歴史を講じた。彼の教育ぶりは実に熱心であつた。彼は教室で講義するだけでは満足しなかつた。彼は毎週一晚生徒を五、六名ずつ自宅に呼んで親子どんぶりのご馳走をして彼らと親しく交り、談笑の中に色々のことを教えた（筆者が内村の集会で内村から聞いたところ）。

第一高等中学校は、内村鑑三が長年求めていた理想の職場のように思われた。彼は誠実に教育に当たつた。父母と別れ、新たに住むことになつた本郷駒込東片町一五二番地の借家は、学校にも近く、狭いながらも夜に生徒を迎え入れるには、絶好の環境であつた。再婚した幼なじみの妻と優秀な生徒に囲まれ、彼は幸せであつた。老いた父母、それに弟妹に援助をする身ではあつたものの、給与もそれなりによかつたので、生徒に親子どんぶりをおごつても、生活に困ることもない。毎週一晚であるから、時間を束縛されるという意

識も、まして時間外労働などの考えもない。要は教育の一環としての生徒指導であつた。彼にとつては若い生徒との談話は楽しく、一週一度の数人の生徒との交わりは、当時の彼には何よりも収穫の多いものとなつた。生活はようやく安定し、彼は希望をもつて教育という仕事に取り組みのであつた。

注 (1) 小原 信『内村鑑三の生涯 日本的キリスト教の創造』PHP文庫、PHP研究所、二〇三〜二〇四ページ

(2) 内村鑑三「日記」一九二四年八月一八日、『内村鑑三全集34』収録。三四一ページ

(3) 北越学館との約定書『基督教新聞』二五六号、一八八八年六月二〇日
(4) 鈴木範久『内村鑑三日録』888〜1291「高不敬事件(上)」教文館、一九九三年一月三〇日、一一二ページ

(5) 内村鑑三「仙台東華学校外国教師総辞職ニ付余ガ感ヲ述」『基督教新聞』四二九号、一八九二年一〇月一六日、のち『内村鑑三全集1』収録、二〇〇ページ

(6) 『内村鑑三日記書簡全集5』教文館、一九六四年七月三〇日。二二六ページ

(7) 内村鑑三の「水産動物学」は、『内村鑑三全集1』の「解題」には、「一八八九(明治二二)年、水産伝習所の第一回生に対して行われた講義の筆録であり、その第一頁に「内村鑑三講述」と記されている。水産伝習所の罫紙(二一行)に毛筆をもって楷書体にていねいに筆録されている。ページ数一八七。現在は厚紙表紙を附して装釘され、水産伝習所の後身である東京水産大学(筆者注、現、東京海洋大学)に所蔵されている」とある。

- (8) 田岡嶺雲「教奇傳」『中央公論』一九二一年六月〜一九二二年三月、
『教奇傳』玄黄社、一九二二年五月一日。のち『田岡嶺雲全集 第
五卷』法政大学出版局、一九六九年二月一日収録、四七三〜七
〇九ページ、引用文は全集本によった。
- (9) 野上弥生子「妻と母と作家の統一に生きた人生」『婦人公論』一九
六七年一月一日
- (10) 内村鑑三「新島先生の性格」『中央公論』一九〇七年二月一日。の
ち『内村鑑三全集15』収録、二四三〜二四四ページ
- (11) 内村鑑三「ウイスター、モリス氏に関する余の回顧」『基督教新聞』
四一三号、一八九一年六月二六日。『内村鑑三全集1』収録、一九
六〜一九八ページ
- (12) 木村駿吉「懐旧談」『道』二二八号、一九三二年六月一日
- (13) 内村鑑三『地理学考』警醒社書店、一八九四年五月一日。のち『地
人論』と改題、版を重ねる。
- (14) 大岡 信「地理の書 思想の書」『地理学考』の内村鑑三「内村鑑三
全集月報1」一九八〇年一〇月(日付なし)
- (15) 内村鑑三日記書簡全集5「教文館、一九六四年七月三〇日。二一六
〜二一七ページ
- (16) 政池仁『内村鑑三伝 再増補改訂新版』教文館、一九七七年一〇月
三〇日。一七九ページ
- 受領日 二〇一九年三月一九日
受理日 二〇一九年六月二二日